

名探偵モンクは握手が嫌い

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

「名探偵モンクは清潔マニアだ」というブログを書いたことがあります（2006年11月28日号）。私は長い間日本を留守にしていたので、BSで放映された「名探偵モンク」を2、3回見ただけでした。モンクがどんなタイプの清潔マニアなのか、あまり細かく観察したわけではありません。

この番組はしばらく中断していたのですが、最近、4回目のシリーズが始まりました。今度はじっくり彼のマニアぶりを観察して、気がついたことを少しずつ書いてみようかと思っています。

最初の放映分を見たかぎりでは、モンクの行動は「清潔マニア」と言うよりも、むしろ「清潔または不潔強迫症」と言ったほうが良いのではないかと思いました。

モンクは、人と握手をするのがキライで、握手をするたびに手を拭こうとします。助手のナタリーは、そのつどハンカチでしょうか、それとも除菌クリーナーでしょうか、白い物を出してモンクに渡そうとします。

これは、明らかに他人をキタナイと思っている証拠で、自分のキレイな手を相手の不潔な手で汚したくないという強迫観念の現れと言えます。つまり、加害者は他人で、自分は被害者だという意識にほかなりません。

自分だけが清潔で、他人はみんなキタナイ。他人と接触すれば汚れてしまう。こういう病的な被害妄想からは何も生まれてきません。他人から逃げるしか方法がないのです。これは、清潔もしくは不潔に対する強迫症と言ったほうがよく、むしろ病気の部類に属します。

と言いますのも、この場合、清潔を求める意志があることは認められますが、自分自身のことはすっぱり抜け落ちているからです。

この点が「清潔マニア」の行動とは異なります。マニア的な行動というのは、あらゆることに完全性を求める行動であって、肝心の自分自身のことを忘れていたのでは、完全とは言えません。

あらゆることに清潔を求める人、時には過剰なまでに清潔好きな人を「清潔マニア」と呼ぶならば、このような人が何よりも問題にするのは自分自身の不潔な状態であり、どのようにすれば自分が清潔になれるかということが最大の関心事となります。

まずは自分自身の清潔を求める情熱が必要なわけで、これが無ければ、完全な清潔を求めようとするマニアックな行動には発展しません。自分だけを先天的に清潔だと思い込んでいますと、それが盲点となり、キタナイのは常に他者であって、自分はただ汚れが感染するのを怖れているだけだという被害者意識しか残りません。

モンクは、人と握手をしたり、死体に触れたりした後で、自分の手や服の袖をナタリーの腕や肩

にこすりつけて汚れを拭き取ろうとします。今度は被害者から一転して加害者になり、自分の汚れは他者に移してしまえばよいという、きわめてエゴイスティックな行動を取るわけですが、これでは、自分の外にあるものはすべて不潔だという結論しか出てきません。

これらは、モンクのマニアぶりを面白おかしく見せようというフィクションだと思いますから、あまりこだわってもしようがないのですが、自分独りを清潔の聖域に置き、外の世界を不潔と見る病的な意識を感じさせるシーンであることには違いありません。

モンクは、一日に100回手を洗うと自称していますから、そうやって守っている自分の聖域に、さほど手を洗っているとは思えない「不潔な」他人に入ってこられてはかなわないという気持ちなのでしょう。

それが他者に対する病的な不信感の現れであり、反社会的な行動であることは、本人も助手のナタリーも分かっているらしく、できるだけそのことを隠そうとしています。モンクが人と握手をした後、ナタリーがこっそりハンカチを渡そうとして何度も失敗するさまが、笑いを誘うポーズの一つになっていました。

こういうモンクの態度や行動を理由にして、彼を「清潔マニア」と呼ぶのは、必ずしも正しい用法ではありません。「マニア」という言葉を心の病気と規定したのは心理学や精神病理学であって、本来ギリシャ語起原のこの言葉は、狂気に近い情熱や趣味を表しましたが、それは決して病気ではなかったからです。

モンクは時々精神病医の診察を受けており、彼のマニアぶりは病的なものとしていますが、これは先ほども言いましたように、完全性を極限まで求めようとする、本来の意味での「マニア」とは異なります。

自分自身の清潔は疑ってみようともせず、他者を一方的に不潔と見る独断が彼の心を支配しており、これは明らかに病的な偏った精神構造と言えるからです。「マニア」とは、あらゆるものを見、あらゆるものを追求する情熱でなければなりません。

私は、「清潔マニア」という言葉を、清潔に人一倍情熱を持つ人という意味で考えており、これは、野球マニア、音楽マニア、料理マニア、蒐集マニアなどといった言葉と、その追求の意志について言えば、何ら変わるところがありません。

このようなマニア的な性格には反社会的なものは何もなく、人に隠さなければならないものもありません。むしろ、何らかの形でマニア的なところのない人は面白くありませんし、それに、この世で成功する可能性も少ないと言えるでしょう。

自分の仕事に打ち込み、それに情熱を傾けている人は、多かれ少なかれマニア的に、自分の人生を何かに賭けていると言えます。

真の「清潔マニア」なら、人と握手をすることをキライはしないでしょう。握手をすることは、精神的な「清潔」をもたらすからです。身体的に言えば、相手の手が汚れているかも知れませんが、自分の手だってそれほどキレイなものではありません。

私のフランスでの生活体験から言いますと、いったん外出すれば、人と握手するのが好きだと

か嫌いだなどと考えている余裕さえありません。否応なく多くの知人と握手をすることになります。外国人の私でさえ一日に10数回は握手をするのがザラですから、土地の人間ならば毎日100回ぐらいは軽くやっっているでしょう。モンクのように一々手を洗っているヒマなどありません。

そして、誰かと手を握り合うという、こんな単純な行為を繰り返すだけでも、多くの人と親しくなり、陽気な一日が過ごせるようになります。握手を嫌がって逃げずりまわるよりも、喜んでやってるほうが、精神衛生上「清潔」だとは言えないでしょうか。

しかし、それでも、時には握手をしたくないと思うことがあります。例えばカフェやレストランで、知り合いの調理人などに手を差し伸べられた時です。こういう時は、モンクの場合とはまったく逆で、自分のキタナイ手で相手の清潔な手を汚してはならないという思いが強く働くのです。

つまり、この場合、加害者は自分のほうで、相手は被害者だということになります。キッチンから出てきた調理人が、私と握手をしたあと再びキッチンに戻り、そのまま調理を続けたとしたら、被害者は、その料理を食べるお客だということにもなるでしょう。

そして、残念ながら、私の見たかぎりでは、誰かと握手をしたあと手を洗わない調理人は意外と多いのです。ギャルソンなどは、お客としょっちゅう握手をしていますが、手を洗うことはまずありません。しかも、その手で、お客に出すパンを切ったり掴んだりするのですから、清潔観念はいったいどうなっているのだろう、と考えさせられてしまうこともしばしばです。

こんな時には、いっそのこと、調理人やギャルソンもモンクに見習って、握手を避けてほしいくらいなのですが、ただし、清潔は自分のためというよりも、人のためという発想の転換が必要になるでしょう。自分を汚れから守るためというだけではなく、他者を汚れから守りたいという視点が必要です。

清潔マニアの究極の行動原理になるものは、他者のためにこそ清潔を求めるという願望にほかなりません。このことにつきましては、私が書いた『清潔マニアの快的人生—永遠のキレイを求めて』（ビワコ・エディション版120頁以下）をぜひご覧ください。

[2007/04/21 magmag]